アメリカの幼児教育

——第四回日本保育學會大会特別講演——

奈良女子大学　小川正通

私はアメリカに三ケ月いつて来たが、勉強もしないで、あちこちあるき廻つたという程度にすぎません。もちろん幼稚園、ナーセリー・スクールは沢山見て参りました。また多少は幼児教育の本を買い、廻らない口で無理を言つてもらつた資料も相当御座います。帰つてからその本を読む暇もまだなく、中の絵を見たという程度にすぎません。だから標題のような講演をするという事はオコガマシイ限りで、たゞ既けまわつて見て来た事を報告するという程度以上には出ません。あまり御期待なさらぬようにあらかじめ御願いいたして置きます。

向うに出掛けるのは、突然決まつた事で、なんの準備もなしに、一月三日の朝、羽田から飛行機で出発して、四十時間以内でサンフランシスコ近辺につきました。サンフランシスコに少し滞在して、それからワシントン、ニューヨーク、ニューヘヴン、シアトル、ポートランド、ロサンゼルス、ベンチユラ、サンタバーバラと旅行し、それから又元のサンフランシスコに戻り、そこから軍の輸送船に乗せて貰つて四月十六日に、アメリカもいゝけれども日本もいゝなあとかえつてまいりました。

シカゴとシアトルの間は汽車で横断すると三泊、五十何時間、しみ〴〵とアメリカはひろいなあと感心しました。面積にして日本の二十数倍、人口一・七、八倍位でしようか。何しろひろいから東と西、あるいは北と南で気候がずいぶんちがいます。サンフランシスコは暖かだつたが、ワシントン辺は日本の十二月末頃の寒さ、ニューヨーク、ニューヘヴンはさらに寒く、後者では吹雪にあいました。シカゴは零下十度という寒さで、ミシガン湖の沿岸は凍つていました。しかし室内は暖房で暖かいので、現在のみなさん位の薄着をし、戸外ではその上にオーヴアを引つ掛けているだけです。太平洋岸のシヤトル、ポートランドでも雪に降られたが、汽車で一昼夜あまりでロサンゼルスへ来ると、こゝは日本の五月頃の気候です。サンタバーバラでは旋風機を使つているというような工合で、とにかく広いことがわかります。

そういうように廻つて、ナーセリー・スクール、キンダーガルテン、小学校、高等学校、大学、それから黒人だけの学校等四十数校訪問して参りました。その他、教育委員会、州の議会、図書館、博物館、美術館、教会、動植物園、映画、野球、——とにかくいろんな施設を見学して来ました。英語の会話はブロークンのまゝで押しとおし、特別な練習もしませんでした。何しろ短かい三ケ月のことでしたから、本に書いてあるようなことは、帰えつてから読めばわかると考えたから所謂勉強は特別にしませんでした。もつぱら向う

に行かないとわからないというものを見ようと力めました。またモテル国だから、ただで貰える資料は出来るだけ沢山貰う主義にしました英会話の練習をしないということゝ、勉強をしないということゝ、それからたゞで貰えるものは出来るだけ沢山貰うようにすることゝこれが私の三原則でありました。

幼稚園やナーセリー・スクールは三十四、五もみたでしようか。わずかの間にあつちこつちずいぶん沢山訪問致しました。ある人は、そんなにあちらこちら旅行して歩いて、さぞたのしいでしようと羨ましそうにいゝました。又ある人はどこでもかしこでも同じような幼稚園ばかり見て歩いて、さぞかし退屈なことでしようといつてくれました。うらやましがられたり、同情されたりしたわけです。それから向うでこんな事もいわれました。幼稚園を代表して来たというからレディが来ると思つたら、日本の幼稚園代表は男ですかといわれて一寸困つたこともあります。又、私の名前のオガワというのを向うではうまく発音出来ないのです。ミスター・オナワという。これは少々気持がわるかつた。オガワ・イクオール・スモール・ブルツクと説明しました。アメリカでもブルツクという一名は相当ポピュラーのようです。コロンビヤ大学にブルツクという人がいて、私はこの人と握手をしました。ワシントンの文部省のミス・ヒルも私のことをオガワといえず、ミスター・キンダーガーデンといつて歓迎してくれました。

○幼児教育の制度組織

最初にアメリカの幼児教育の制度組織についてお話いたします。アメリカの幼稚園は日本のものよりも少し古く、約九十年前にはじめて開設されました。それはフレーベルの流れを汲む独逸語を話す幼稚園であつたが、あとで英国からわたつて来た英語を話す幼稚園が入り次第に普及発達して、今日の全盛を見るようになりました。現在のキンダーガルテンは大体五才児以上のものを收容しています五才以下というのもいない事はないが大部分は五才以上です。アメリカの公立幼稚園は公立小学校に付設されているというより、その中に含まれているといえましよう。もちろん私立幼稚園も相当あります。しかしその数は次第に減少して来ています。はじめ私立幼稚園だつたものがナーセリー・スクールに転換したのも可成あるようです。シカゴ大学の大学附属の幼稚園では、四才児と五才児の名称を区別して、四才児をジュニア・キンダーガルデン、(Junior Kinder-garten)五才児をシニア・キンダーガルテン(Senior Kinder-garten)といつています。日本の園児数は三才児、四才児、五才児を合はせて二十数万という数ですが、アメリカでは約百万人、その中には四才児もいるが、五才児の約三五パーセントはキンダーガルテンに通園していると推定されるでありましよう。せいぜい、日本では五才児の一割程度のものにすぎませんから、これを以てもアメリカの幼児教育普及の程度がわかると思います。他方ナーセリー・スクールの方には四才、三才、二才という小さい子供が行くようになつています。公立の幼稚園では保育料、即ち授業料はとつておりません。義務制というのではないが、義務に近いともいえましよう。日本ではご承知のように義務制でないので、保育料を徴收しております。こういう点はうらやましいと思いました。私立幼稚園の場合はもちろんとつているところが多いと思います。ナーセリー・スクールの方は必ずしも正式の学校教育体系の中に編入されていないが、教育の下の段階というように考えられているのではないかと思

います。しかもナーセリー・スクールは非常にヴアラエテイにとんでいて、色々な種類のがあるようです。大学に附設された幼児研究用のもの、そうでないもの、また働らく母のためのナーセリー・スクールもあります。從つてナーセリー・スクールには一日三時間位保育するものや、朝早くから夕方まで開かれておるのもあります。一体ナーセリー・スグールは前の欧洲大戦後英国から入つたものですそれ以前にアメリカにはデー・ナーセリーといつたものがあり、それは日本の保育所（託児所）に当りましよう、それも次第にナーセリー・スクールに転じて来ております。シカゴのスラム街にデー・ナーセリーがあるということで見学に行つたが、（有名なセットルメント、ハルハウス）もとはデー・ナーセリーであつたが、現在はナーセリー・スクールと名称を変えていました。またシアトルに日本人のキンダーガルテンがあるというので行つてみましたが、それもナーセリー・スクールでした。そこでは二世の婦人が先生になつて、三世の幼児を保育していました。三世になると日本語は殆んど全く出来ません。こゝではもとは五才児もあづかつておつたが、五才児の方は小学校のキンダーガルテンであずかることになつたので、今は四才児以下をあずかり、ナーセリー・スクールになつたということでした。

一体キンダーガルテンが急速に小学校の中に入れられるようになつたのは一八九〇年以後のことだが、日本では大、中都市は別として地方に行くと中々そういう工合に行つていない。日本の幼稚園は大体アメリカのキンダーガルテンとナーセリー・スクールの合の子みたいなもので、保育所というのは、ナーセリー・スクールの一部に当つているように考えられました。

○クラスの編制と教員

キンダーガルテンの五才児の体格は、日本の五才児より半年位は大きいように見受けました。全部が全部そうだというわけではないが、平均して半年位は大きいようです。公立のキンダーガルテンは大体、午前、午後の二部保育をやつています。ダブルセツションといい、午前は八時半から十一時半位まで、午後は一時前から三時半頃までやつているが、先生はたいてい同じ人が午前午後の二回に亙つて保育しているのが大部分のようです。なかなか大変な事だろうと思いますが、子供の数がそう多くはなく、大体二十人から二十五人位について先生が一人という割合です。ある州、たとえばイリノイスなどでは、幼児数三十人以上に及ぶときにはクラスを二つに分けねばならぬという規定があるようです。クラス数は午前午後で二クラス、それにもう一つ午前午後の組があつて計四クラス位のが多く六クラスというのはあまりありません。

午前午後を一人の先生でやつているという外に、先生二人で午前の先生が保育しているときは、午後の先生が助手になり、午後の時には午前の先生が助手をつとめるというような、幼稚園もありました。またお母さんが当番制をとり手伝つているところも見受けました。この当番制について私はきいてみました。『これは自発的にこうしているのか』と、すると『自発的だ』ということでした。もちろん大学附属のキンダーガルテンでは、先生の外に大抵助手がおります。

先生は可成年配の人が多いようです。アメリカのキンダーガルテンで、先生に年配の人が多いというのは、この仕事を腰掛け的に考

えていない証拠にもなるのではないかと思われますが、しかし年配の人が多いだけに中々動かない。日本の先生はコマメによく動くけれども、もちろん、日本の子供も大変コマメに動くが、あちらの先生はソウ動かないのです。二部保育とも関係があるのでしょう。

先生の学歴については、最近大学出の先生も大分殖えて来たようです。サラリーは州、都市によつて多少ちがうが、大体、初任給二〇〇弗強位、日本の金に直して月七万円位でしようか。日本と貨幣価値がちがうから一概にはいえないけれども、日本より三か四倍は多いといえましよう。従つて十倍以上もらつているというようなことはいえないと思います。また日本の公立幼稚園の先生のサラリーは小学校の先生とちがい、市区町村から出るが、向うでは小学校の先生と全く同様であります。色々貨幣価値の相違ということはあるが、経済的に日本よりめぐまれているということはたしかでしよう。何しろ向うではセカンドハンドの自動車が一台五〇〇弗から六〇〇弗位でもかえるんだから、吾々が自転車を買うのと同様です。

○幼児教育の根本的の考え方

さて、アメリカの幼児教育の根本的な考え方はどういうことかというと、ある本にはこうかいてあります。

『今日のアメリカのキンダーガルテンは、五才児の発達段階にふさわしい教育をあたえることであり、その現実を満足させ、つゞく次の年令のための準備をしてやることです。そしてその教育によつて肉体的、情緒的、精神的、社会的な一切の力の発達を意図しています。しかし幼児が現在要求し、将来求めるものをすべて与えようというのでなく、新しい地位に当面したとき、それを解決し得る力をつけて置こうと考えているのです。……教員は幼児の能力と可能性に関心をもち、それに従つて立案するわけです。』

○幼稚園の設備

次に、キンダーガルテンの設備のことについて申上げるが、四つのグラスがあるという場合に、保育室は二つ、専用の遊戯室はないところが大部分です。しかし保育室は日本の保育室より大分広く立派に出来ています。日本の一倍半か二倍位はありましようか、小学校の一部の日当りのいゝところを保育室として使つております。運動場は小学校と区別して、金網などはつてあるところが多いようだし、特別に教員室というなうなものはありません。大体保育室の中に先生の机を持ち込んで、真中にピアノなどおいて、先生の机は、すみつこのところにあるのが多いようです。一クラスは三十人以内、部屋のひろさは二倍だから、室の一部におみせやごつこの店位は出せるようになつています。また子供のまゝごと用台所をつくつているところもあります。保育室のとなりは物置きとかトイレットになつています。日本のように、トイレットに行くのに時間をかけるようなことがなく、その部屋だけで大抵のことは間にあうようになつています。色々な保育のための材料は、物置に整理整頓されています。

ぜいたくなキンダーガルテンでは、絨毯をしいているところもあり、日中でも電燈をつけて保育しているが、それは新しい最近の建築では間接照明となつています。窓は矢鱈に明けず、通風装置は別につけております。天井には防音装置を施こし、それから窓のところが出窓のようになつていて、そこを戸棚のようにして、金魚鉢と

か。植木鉢なんかをおいてあります。保育室に木工台の置いてある園が多いし、画架は二つ三つはあります。それはポスターカラー用です。積木は大型のものをつかい、小さいものは殆んどつかいません。まゝごと用の台所用具、乳母車などもたいていあります。先生が家から不用の、お父さん、お母さんの古い帽子や、靴、ネクタイ等を持つてこさせて、その帽子をかぶり、靴をはいて、乳母車をひいて女児は遊ぶのです。

玩具は現代アメリカ文明の縮図というようなものが多く、相当精巧に出来ております。そして子供のためによく考えている親切なものがおおいようです。また子供が古材や紙の古箱で共同作業によつてつくつたようなものもつかわれています。砂場は日本のものと同じです。室内設備が整備しているのに比べて、戸外設備と運動場はたいしたこともなく、日本の方がかえつてすぐれているようにさえ思われました。日本のいゝ幼稚園では自然などもよくとり入れ、子供のための遊具も揃つており、アメリカのものに決しておとつてはいないという気がしました。

戸外で遊ばせることは、日本の方が多いと思います。さむいところを廻つて来たというせいもあるが、戸外の活動は十分には見られませんでした。日本では割合に外であそばせる機会が多く、そのための遊具も揃つているけれども、これは子供の数がおおいことにも基づくのでしよう。室内設備が悪く、幼児数が多いから、日本では外での活動が多く、その反対のアメリカでは室内活動が多いのかも知れません。その結果、アメリカは室内の保育が発達し、日本は戸外のそれが発達したともいえましよう。

絵本もいろ〳〵あるが、総体に日本の絵本よりも幼児の生活にぴつたりした編集で、色彩もいゝし、紙質もいゝし、一言でいえば相と当親切のように思いました。

○保育の實際

さて次に、アメリカの保育の実際について述べましよう。デユウイの所謂、『一切の教育活動の出発点は子供の本能的衝動的な態度、活動の中にある』ということを、アメリカでは非常に重んじており、そして子供が、自分を完全に発揮出来るようないゝ環境をあたえるようにと努めているのです。

朝の検査は、先生や看護婦がやつているところが多いようだが、どういう風にやつているか、これは見る機会を失い残念でした。朝のあつまりには出席いたしました。尤もどこでもかしこでも、朝のあつまりをやつているかどうかはわかりません。私の見たのは小学校児と、幼稚園児とを一緒にしてやつていました。そのさい国旗を振揚して、感謝・誓の言葉も述べました。保育室にも公立の場合ですと大抵国旗が掲げてあります。そういうことからはじまつて、まとまつた仕事に入るのだが、一番多く見たのは絵を描いているところで、画架により、ポスターカラーを使つて自由に描いています。紙の大きさは日本の画用紙に比べて二倍位大きいが、紙質は必ずしも上等とはいえないと思います。ポスターカラーは、先生が画架のところについてゐるビンに入れてあたえております。あるいは先生と幼児とでといていました。紙は自由に何枚でも使用できるように備えつけてあります。もちろんクレヨンも使用しないことはありません。私は子供の描いた絵を数十枚貰つて来たが、日本の子供の絵と比べると、日本の子供の絵は形がうまく、日本の子の質の良さを示すが色彩感覚ということになると向うがすぐれているようです。

それに描き方や構図が大胆であり、日本の子供の絵はややコマッシャクレている。コセくしているという感じです。紙も小さいし、形はいゝが、とにかく何か奔放さが足りないように思われます。

気がついた事は、向うでは左利きが多いということです、無理に右利きに直さず放つてあるそうです。三十人も子供がいると、左利きの子供が四五人はいます。左利き用のノコギリやミツトなんかも出来ているので、左利でも不便はないのでしよう。絵と関連して左利きの話をしたのは、無理に右利きに直さないこと即ち子供を家庭でも幼稚園でも拘束しないことを申上げたかつたからです。またフインガー・ペインティング（指絵）は相当盛んなようで、専用の汚れのすぐとれる机も用意してあります。木工も中々盛で、可成進んだもの、飛行機とか、船とかを釘づけにし、着色もしていました。それも単独作業のみでなくて、共同作業もやつているのです。個人的にヌリエをやつている場面を三回ばかり見ました。その二回はキンダーガルテン、一回はナーセリー・スクールでした。『アメリカではヌリエをやるのか』ときいたら、その先生は大変アワテ気味で、ここではやらぬが、家から持つて来たんだと弁解したところから考えると、幼稚園ではやらぬのが建前になつていることが推測されるのです。

文字を教えるという事も積極的にはやつておらず、大体やらぬ方針のようです。粘土細工は盛んにやつています。屢々着色をしているが、さらに二時間位で焼ける釜をもつた園もありました。

音楽リズムについては、ピアノのない施設は見当らぬが、楽器を使わないで先生が歌い、これに唱和させている園もあり、簡単な楽器による楽隊もやつていました。しかし音楽よりもむしろリズムの方が盛んなように思われました。しかも個人々々の可成自由な表現を重んじています。大体において、向うの先生はあまり動きません。日本よりはだまつていて子供を動かしているが、これは先生の年輩二部保育、幼児教、日常のしつけ等とも関係があるのでしよう。

製作の場合、ポスターカラーの時なんかは、先生が廻つて見て歩き、小さい声で個別指導をしています。また一同を集めて、絵本を読んでやるという事はやつております。十時半頃に子供にミルクを与えます。私にもミルクの席に入らぬかといわれて参加したが、ストローのようなもので小さいはこのミルクを飲むのですが、ビスケツト一ト切れがついており、その出し入れはみな幼児自身がやつております。当番をやる子供の名前は紙にかいて壁にはつてあり、その子供がなかなかやります、フインガー・ペインティングや粘土細工の時にも、その跡始末は当番が中心になつてやります。

○日本の幼稚園との相違點

日本の幼稚園と比べて違う点は、休息をよくさせるということでジエームスの『三才から六才』という本には、『この年令の子供は、休息をやらない年令であり、アクテイヴィテイ(Activity)の急流である』と書いているが、それだからこそ休息が必要と思うのです。ミルクのあと、リズムのあと、戸外活動のあとなどには、備えつけのベッドがない園では床の上に、このテーブル（二尺に三尺の普通のテーブル）より少し大きい位の家からもつて来た毛布をしいて休息させています。もつともこの種の休息は一日一回のようです。電燈を消し、カーテンを降し、子供達に物をいわせないでしずかに休息させています。新聞紙を代用しているところもあつたし、極端なのは机の上に、それも頭、足、頭、足という風に交互にねかして

休息させていた園もありました。またある園では、休息のときに当番の子供が、『今休息中だから妨げないで下さい』とかいた一尺に一尺五寸位の紙を出入口のところにかけているのも見受けました。日本の幼稚園は休息なしに少し子供を活動させすぎるきらいがあります。先生が熱心さのあまり、そうなのではないでしようか。休息の組織を考える必要がありましよう。また向うの子供は廊下を歩く時でも、静かにあるくし順位を争いませんし、物を丁寧にあつかつて、いためる事が少ないようです。女児を先にしたり、女児をいたわるしつけも幼児期からやつています。

又日本の子供よりも大体社交的です。民族のルツボといわれる国柄であり、小さいときからしつけられるからでしようが、私共外国人が参観に行つても口をあけてボンヤリ眺めているというような子供はおりません。名や年を聞いてもはつきり答える幼児が多く、私のそばによりそい、二十分近くもダツコしていた女児さえありました。絵はずいぶんもらつたが、二、三の園で絵を下さいといつた時先生はその絵を画いた子供に、『この先生は日本から来られた先生なんだが、あなたの絵をほしいといつておられるが上げてよろしいか』とことわつていました。ささいなことだが、小さい子供でもその意志、人格を尊重することがうかがわれました。それからその日の保育が大体終つたときに、今日あなた達はどういう事をして遊んだか、子供がやつたことを一人一人きいて、今日やつたことの評価をやり、また明日の計画を話し合つていたことはよいと思いました

次に子供の生長発達の記録のことですが、日本でも『幼児指導要録』によつて記録することになりましたが、向うの公立幼稚園では小学校と同様なものを使用しています。その見本ももらつてきました。またカリキユラムについては、ずいぶんあちらこちらで聞いたがキンダーガルテンは小学校とは違うから特別なカリキユラムはないといつていた先生もあり、そうかと思うと殆んど小学校と同様に考えているところもなくはありませんでした。大体において、ソースユニット（源泉単元）をもとにして、プロブレムユニット（問題単元）を立てて指導しているように見受けました。

またP・T・Aの会合にも出て見ました。昼は母、夜は父に出席して貰うという園もありました。園の設備が完備しているので、P・T・Aの会費はあまりとる必要がないらしく、その点日本のP・TAとはずいぶん違うようです。大体父母と先生の社交、教養の向上をめざしているが、その出席率は六〇％位らしいです。バザーなんか開いてお母さんがお菓子を作つて売り、その益金で備品の一層の充実を考えているP・T・Aももちろんあります。ある学校のP・T・Aの会長にあつた時、PとTと一体どちらの力が強いかとの愚問を発したところ、そくざに『もちろんPの方がつよい』と答えた婦人もございました。

○大學に於ける幼兒教育研究

それから次に、アメリカの大学における幼児教育研究のことだがアメリカの大学では、幼児の教育について実によく研究しています。イエール大学の今日は既に引退しているが、ゲセル博士など、有力な学者がこれに当つています。幼児を医学的、心理学的立場から研究したゲゼル博士は、日本でも有名だが、私も特にニューヘブンに一人旅をして、お逢いしました。その時博士は日本の子供は何ケ月位で歩くのか、と私に聞いたので、十一月位から十四、五ケ月にかけてだと答えたら、アメリカでもそれは大体同じだとのお話でした。

別れの挨拶の時、『日本の子供の幸福のために！』といつてくれたが日本の学者よりはこういう点気が利いていると思いました。ニューヨークのコロンビヤ大学でも幼児のみに限らずひろく児童全般についてよく研究しています。日本にもこられたジャーシルド博士には大変御世話になりました。そして博士の著『児童の発達とカリキュラム』について私の感想をのべたところが、『児童の興味』という本をくださいました。またシカゴのルーズヴェルト・カレッヂ、ニューヘヴンのステート・カレッヂ、バークレーのカリフオルニア大学でも、幼児教育について相当よく研究しているようです。ニューヘヴンのステートカレッヂで・幼児教育の講義に出席して見たが、そこでは女子学生のみでした。しかしルーズヴエルト・カレッヂでは、男学生も講義に出ていました。しかも講義の時一番最初に手を上げて質問するのは女子学生でした。

みなさんもよく御存知の、保育要領編集について御世話になつたヘフアナン女史や、ヤイデー婦人にもお逢いし、種々御世話になりました。大体においてかつて日本に滞在していた方々は、大変親日的であるようで、私共を大歓迎してくれました。

こちらに帰る一寸前に、バークレーのカリフオルニア大学の教育実習の講義にも出てみました。それは工作の講義だつたが、幻燈のスライドの製作を女子学生が熱心にやつていました。教育実習は大学の最終学年に、一日宛半年か、半日宛一年かやるようだが、幼稚園の先生希望者は小学校の下級の実習もいたします。

次にアメリカの幼児教育関係者が、どの程度日本の幼稚園や保育所の現状を知つているかという問題ですが、実状は殆んど知つていないというのが本当でしよう。ワシントンで『世界二十七ケ国の幼児教育』というパンフレットを買つたが、その本の中にも日本の幼稚園や保育所のことは出ていず、残念です。またもう一つ私が大変残念に思つたのは、もしも保育の実際家と一緒に行つたならば、色々技術的方面についても細かく観察出来て、参考になるところが多かつたろうと悔まれたことです。

○結　論

種々申上げたが、結論として、アメリカの幼児教育界は非常によくやつている。とつてもつて参考に資すべき点が甚だ多いということです。しかし日本の保育界も決して駄目だとはいえません。日本では先生は総体的に低い学歴で、安い俸給で、不完全な設備で、おまけに一組の幼児数が非常に多い割合には、よくやつているといわねばなりません。先生方の熱心さに敬意を表さずにはいられません。こういう風に考えると、日本の保育界の将来も決して悲観したものではない。未来に希望がある。――これが私のアメリカの幼児教育視察の結論で御座います。

――了――